近松門左衛門と密教の高僧

運敞—淨嚴—蓮體—契冲

宇田川文海（舊稿）

日露戰爭後！妙な風の吹廻しにて天理教唯一の機關誌道の友に執筆せる宇田川文海翁とは屢々接觸した關係がある、又高津の藤村叡運僧正は云ふ迄もなく有名な歌學泰斗、和歌に關しては毎々懷しく講義を聽き淨瑠璃の話、剛平春大夫の逸話など……拙者の淨瑠璃字引の如き因緣があつた。其の後大正十二年一月文海翁が拙者に示された誌稿、これは諸方面の關係情勢を愼重考慮の結果今日迄保留常に登載の機會を候ふて居た、所が這般この淨瑠璃雜誌更生に際し文海翁叡運師の厚恩報謝のため、文海翁が草したる近松門左衛門と密教の高僧と題する舊稿を茲に謹んで掲載する淨瑠璃人殊に近松研究者には恐く珍品ならん歟。（樋口五松園主人）

近松と運敞和尙

週刊朝日の近松記念號に載せてあつた、內海幽水君の『近松雜話』の內に『契冲と同門』の一節があつた。私は契冲阿闍梨崇拜者研究者の一人として、多大の興味を以て之を讀んだ。而して豫て聞いてゐた、近松と密敎の高僧との關係に就て書いて見たくなり、急に筆を執つて此稿を草し『近松雜話』の一に供へる。

是は藤村叡運僧正に聞いた話であるが、僧正が未だ若僧で京都の智積院の學寮で勉學してゐた時、一年の夏、書籍の蟲干の手傳ひをした。智積院には運敞藏と云つて、運敞和尙の讀んだ書籍を納めた藏がある。其內に納められた數千卷の內典外典は、皆和尙の手澤の存するもので、當時の什寶であるが、其書籍の蟲干であつた。其中に淨瑠璃本が數十冊あり、而も夫が普通のものよりは大本で、製本も華美で、悉く近松門左衛門の著はしたもの、處々に朱で批評が加へてあつた。後に彼程の歌人になる僧正のことであるから、若い時から文學の趣味があつて、此の淨瑠璃本に目を注めた。運敞律師とも言はるゝ眞言の大學者が、淨瑠璃本を讀むさへあるに、此評まで加へるとは妙な事であると思つて、寮長の老僧に之を質すと、老僧は笑つて『近松門左衛門は、運敞和尙に就て佛敎を學び、時々當院に參詣し、和尙とは師弟の交際であつたので、一部の淨瑠璃を作るごとに、先づ草稿を和尙に視めして訂正を請ひ、いよ〳〵出版することになると、別製の本を持參して和尙の閲覽に供へて批評を請ふのを常としてゐた。和尙もさすが公然と机の上に淨瑠璃本を展べて見ることを憚られ、東司に上ることにその淨瑠璃本を携へて讀まれた。和尙は行住坐臥書物を手から放した事がないから、東司にも前に見臺が置かれて、朱硯に筆までが備付けられ、書物を讀む

ばかりでなく、書入までするやうに、整然と準備がしてあつた。和尚は此の見臺に近松の淨瑠璃本を展べて、且つ讀み且つ評したのだ。それが他の書物と共に、今尚保存されてゐるのだ。當寺には和尚と近松の贈答の消息文、其他近松の筆跡が多くあつたといふことであるが、今は皆散失して、只僅に一枚だけ、老僧が胡坐して團扇づかひをしてゐる上に時鳥の飛んでゐる圖に『寢勝手の左の耳や時鳥』の句を書いた自畫賛が殘つてゐるばかり、此の句は言ふまでもなく、北面右脇の佛涅槃の相を思ひ寄せたもので、此の一句を見ても、門左衞門が佛學に心がけのあることが知られる』と、話して呉れたのを面白い事に思つて今猶記憶してゐると、謂つてゐれた。

私は叡運僧正に此の話を聞いてから、此の外にも猶近松と運敞和尚に就て何か逸話はないかと、其の時代の事を書いた書物を讀むことに注意を怠らない樣にしてゐるが、何も見當らない。只『近世叢語』に、運敞和尚の逸話が話されてあつた。是は直接近松には關係はないが、能く考へて見ると、面白い節がある。其の話は此うだ。

智積院の運敞僧正は聯歌を善くした。一日禁中に聯歌の御會が催されて僧正も召された。詔を奉じて將に朝參しやうとすると、其の徒弟の一人になる快圓といふ僧が、僧正の前に出て『貧道は從來智積院僧正が吾が眞言密教の爲に朝參されたことは聞いてをりますが、聯歌の御會に預る爲に朝參された事は未だ曾て承りません。今日の事は既に御召に應じられた事であるから今更致し方がありませんが、他日又此樣な詔がありますならば、固く御辭退に成つて然るべきでありませう。苟にも智積院の僧正とも有らうものが、聯歌を以て世に名を知らるゝならば、一山の僧徒等、恐らく靡然として之に傚ふに至りませう』と、儼然面を犯して諫めた。僧正之を聞いて『汝の言ふ所理の當然である。既に其の非を知る上は、他日を期するまでもない、今日を以て御辭退に及ぶであらう』と言つて卽ち使僧を走らし、其の旨を陳べて固く辭し遂に朝參に及ばなかつた。而して其の後は斷然聯歌を廢したと云ふことである。

私は此の話に因て、運敞和尚が啻に優れたる佛教の學者であつたばかりでなく、文學にも秀でてゐて、近松が和尚を師としたのは、佛教と文學を併せて學ぶ爲であつた事も知られた。

又、近松が淨瑠璃の新作を上梓することに、その第一版を上等に製本して、之を後水尾、靈元の兩上皇、後西院、東山の二帝に奉つて乙夜の叡覽に供へ、之を御本と唱へたといふ說があるが、之を事實とすれば、此の事は恐らく運敞和尚の執奏に成つたものであるだらうと思ふ。私は此の二ツの考へからして、此の話は近松の研究に取つて、頗る興味ある資料であると思ふ。又、同じ『近世叢語』に此ういふ話が出てゐる。是は近松には全然關係の無い事であるが、前に擧げた話の、運敞律師を諫めた快圓坊の人と爲りを知る事の出來る面白い話であるし、又、契冲阿闍梨の授戒の師ではないかと想はるゝ點もあるから、因に紹介する。

延寶中に洛東の智積院に快圓坊といふ者があつた。肥前平戸の人で、眞率にして毫も飾氣なく、密教に精錬して、而も梵字を能く書いた、後水尾上皇、智積院に詔して之を召された。運敞僧正之を聞いて、快圓の平生の氣質を知つてゐるか

ら、之を側近く喚んで法皇、梵字を覽ることを思召したまひ特に詔して汝を召されたのは、實に此上もない光榮である。平素のやうな疎末の行粧では失禮であるから、明日は盛服を着、若干の跟蹤をも召伴れて謹んで朝參いたすやうに』と、懇に訓誡を加へた。快圓之を聞けども、敢て喜べる色もなく默つて其前を退いた。翌朝蚤く僧正にも告げずして、褻衣の上に木綿の法衣を着け、大小の筆を携へ、肅然として單身出掛け、宛然平人の家に詣る如く、ツカツカと御門を入つた。門皂之を見て、乞食僧だと思つて誰何めた。が、快圓の辯解に因つて、始めてそのお召しに應じて朝參したことを知り恭しく內に通した。快圓は奏者に引るゝまゝ、何の恐るゝ色もなく、徐々と御前に進んで拜禮した。卽て仰せに從ひ、紙を展べ毫を揮ひ、大小の梵字を書いたが、宛然龍蛇の走るが如く、その妙實に言ふ可からず、上皇之を叡覽あつて御感斜ならず、書き終るに及んで左右に命じ數匹の絹を賜はつた。快圓頓首してその恩惠を謝し、さて申すやう『貧衲は紙衣を以て一生を了る者に候へば、此樣な物を頂いても用ふるに由なければ、失禮ながら返上仕る』と言つて、そのまゝ筆を携へて退出した。上皇之を目送りたまひ『嗚呼、淸にして奇なる哉』との御賞美の詞を賜はつたといふことである。安藤爲章の契冲阿闍梨の『行實』に、阿闍梨が再び高野に登つて『菩薩戒を圓通寺の快圓に受く』と記してあるが、此の快圓は前に擧げた快圓ではあるまいか。而して快圓が揮毫に對する上皇の恩賜の絹を辭したのと、阿闍梨が、著書に對する義公の謝儀の銀と絹とを受けて、之を人に施したのと、異曲にして同調、その淸奇高潔の意思が能く似てゐるので、私は此感を生じたのである、記して世の識者の訂正を請ふ。因に言ふが徒弟快圓の諫めを容れて、聯歌の爲の參朝を辭し、且つ好める聯歌を廢めた運敞僧正が、過ちを知つて改むるに憚らない、その度量も偉いが學德雙絕と言はれる智積院の大僧正に向つて、敢然としてその非を糺して憚らず、且つ其身上皇の御召しを忝うしても敢て喜ぶ色もなく、御前に出ても、敢て恐るゝ色もなく從容自若として、出家人の面目を全うした無位の快圓は、其名を辱めない快僧である。否。眞の沙門である。近來は、紫衣を紙衣より賤しんだ道元禪師や、將軍や執權をも物の數とも思はなかつた日蓮上人に、大師の諡號を願ひ、その宣下を得て恰も鬼の首でも獲たかのやうに手柄顏をして、得々揚々として祝賀會までも開き、加之に之を敎勢宣傳の道具に遣ふ計畫をしてゐる。世の所謂名僧知識があるといふことであるが、快僧快圓をして之を見せしむるならば、何と言つて嗤ふであらう。否、何と言つて嘆くであらう。否否、當人の道元、日蓮の二高僧は、之に對して如何なる感想を抱いてゐるだらう。脫線序に一言を添へる。

近松と淨嚴和尙

私は先年時鳥の名所で名高い、河內天見村（淸水）の地藏寺へ時鳥を聞きに行つて現住の弘道僧正に相見したが、僧正は近代の名僧照遍和尙の高足の弟子で、是も亦學德兩ら優れた高僧である。私の名を知つて、多忙の中に親しく談話され且つ『當時の開山蓮懼和尙は、淨嚴和尙の高弟で佛學、梵學漢學、國學の諸學に通じ、文學にも造詣が深かつた。淨瑠璃樂の始祖と言はるゝ、近松門左衞門は、淨嚴和尙に佛學を學んだので、蓮懼和尙とは同門とも云ふべき關係があるので、

頗る親密の交際であつたらしい。その事に就て師の照遍和尚から聽いてゐる事もあるが、今日は他に來客もあつて、話す間がないから、期して泊りがけにおいでなさい』と、懇に言はれた。私は契冲阿闍梨の研究の爲め、阿闍梨と師友の交際であつた、淨嚴律師の事も多少は知つてをり、それと同時代に在つた近松門左衛門が、何か兩師と關係がありはしなかつたかと、豫てその事を心に懸けてゐたから、之を有難い事に想ひ『期して必ずお話しを聽きに參ります』と、お約束をして歸つたが、その後病魔に妨げられたり、窮鬼に逐はれたり事故に障へられたりして、今日は〳〵と思ひながら、徒らに日を送つたが、圖らずも『週刊朝日』の『近松雜話』に此の淨嚴（覺彦）といふ和尚の門下に、有名な契冲阿闍梨が出てゐる上に、不思議にも巢林子は、同じ淨嚴の教へを受け、淨嚴の高弟の誠道（蓮體）といふ坊さんとは、親交があり、その僧が又眞に八宗兼學の名知識で、國漢文の素養が十分にあつた。近松は、大阪から駕を飛ばして、此寺に來て（河内高安の敎興寺）寺の座敷で高僧の物語る和漢の故事や經典の物語に耳をすましたといふ云々」の事が書いてあつたので、豫てお約束をしておいた、地藏寺の和尚のお話しを聽いたら、或は此事を確める事が出來るだらうと、急に思立つて去る十二月十四日、老友小澤扶公に扶けられて、重ねて地藏寺を訪うて、弘道僧正に相見して、淨嚴和尚と近松の關係を尋ねた。僧正はその師の照遍和尚より聞くところを、諄々として話され、且つ當寺の開山蓮體和尚の、自筆の日記、遺著等數十冊を示された。左に僧正の談話の大要を記し、次に私の意見を附することにする。

淨嚴和尚（字覺彦）は如法眞言律宗の始祖、鬼住延命寺の開山にして、佛學の蘊蓄尤も深く、梵學の造詣も亦當時天下に匹儔なく（悉雲三密鈔の名著がある）その德望一世に冠絶し德川五代將軍綱吉の、深き歸依崇敬を受け江戸の湯島に靈雲寺の大刹を開き、講經說法灌頂授戒、數十萬の道俗士庶を敎化した。幕府三百年間の一大名僧である。前にも言ふ通り、當地藏寺の開山蓮體和尚（字は本淨）はその高足の弟子であつた。予の師匠の照遍和尚はその法系を繼いで、明治年代の名僧であつたことは、人の能く知るところ、尙和が、延命寺に傳はる說話と、且は長野に住んでゐた、金玉といふ盲人の淨瑠璃語りが、その所持の淨瑠璃起原書に據つて話した說とを、併せて語られたのは、斯うである。

『近松は佛敎の信者であるから、藥師如來の東方淨瑠璃世界の敎主である事を知り、自分が淨瑠璃作者である上から、深く此の如來を信仰してゐたが、延命寺の隣刹にして、しかも淨嚴和尚の關係のある、常樂寺の藥師如來は、稀代の名作であつて、その靈驗が極めて著明であることを聞き傳へ、時々參詣の歩みを運び、願くば今生世俗の文字の業、狂言綺語の誤りを懺して、當來世々、讃佛乘の因、轉法輪の緣と爲さんの上を越えて、自分の作る淨瑠璃、卽ち文字の業に、狂言綺語の誤りなく、來世の因緣を善良ならしむるのみならず、現世に於て、勸善懲惡、人を誘導感化するの具と爲さしめたまへと、一心不亂に祈願したが、此の緣に因て淨嚴和尚と辱知になり、遂に師弟の契りを結ぶことになり、引いてその高弟の蓮體和尚とも、同門以上師友の交はりを爲すに至り、佛敎の敎養を受くる上に、その著作の淨瑠璃本を視して、佛敎と

文學に就ての信仰思想、且は辭句の訂正をも請ふた。その緣故よりして座元の竹田出雲も、和尙の歸依者となり、その名作の「菅原傳授手習鑑」の、いろは……云々の一章の如きは和尙の筆に成つたものだと云ふことである云々。』

僧正はかう語つた後に『前に言ふ通り、師の照遍和尙も、口碑と傳說と金玉の談話に依つて話されたので、他に典據のあつたのではないから、之を確實といふことは出來ない。幸ひに淨嚴和尙にも蓮體和尙にも、自筆の日記が數十冊殘されてあるから、之を仔細に調査したならば、或は資料が得られるかも知れぬと思つて、閑暇のある時には、蓮體和尙の日記を飜閱して見るが、未だ是といふ事を見出さない。近松に詳しい貴下が見たら、或は好い材料を見出す事が出來るかも知れない、之を御覽なさい』と云つて、蓮體和尙の日記と著書を、私の前に積れて、私は先づ蓮體和尙の日記を手にして、何卒して近松に關係の事を見出したいものと、目を皿のやうにして、時の移るを知らずに、十冊の日記を幾度か繰返したが、近松とも門左とも書いてなかつた。只間接に近松に關係のあるらしい事を見出したから、それを寫し取つた。次に四五の著書にも目を通した。之にも直接近松に關係はないが、それに依つて又大に得る所があつた。その內の數項を抄出して、やがて日が暮かゝつて來たから、僧正の好意を謝し、再來を約して庭に降り立ち、夕陽に映じて一層の美を添へた、庫裡の前の老楓樹を眺め霜葉は二月の花よりも紅なりを微吟しながら、扶公に扶けられて門を出たが、僧正は阪の下口まで見送られ、端なくも虎溪の三笑の古事を憶出して、三人一時に呵々大笑をした。

是より……蓮體和尙の日記と著書を根據にし之に私の想像と考察と判斷を加へて弘道僧正より聽聞した所の照遍和尙の近松談に批評を試み、且ついさゝか駄足を添へる事にする。

照遍和尙の談話に依て、近松が淨嚴和尙に弟子の禮を執つたとすれば、近松が猶京都に居た時の事になる。何故なれば、近松が京都より大阪へ移つたのは、元祿三年の正月であつて淨嚴和尙が幕府の召しに應じて、江戸へ往つたのは、貞享元年の十二月で、それより七年の前である。和尙はその後元祿十五年六月二十七日の入寂まで、江戸に住んでゐたからである。近松が淨嚴和尙の學德を慕つて、遙々京都より河內の鬼住まで出て來て、入門したとしても、行通不便のその時代に然う度々遠路の處を通ふ事は出來ないから親しく敎へを受けることはむづかしい。加之に淨嚴和尙は、講經說法授戒灌頂の爲め、東奔西走、席暖かならずであつたから、その事は如何であらう。近松が常樂寺の藥師を信じたといふ事を事實として、それを大阪へ移つた後とすれば、蓮體和尙は師の淨嚴の不在中延命寺を兼住してゐたから、常樂寺參詣の因緣から蓮體和尙と辱知になり遂に師弟の交はりをするやうになつたらうと思ふ、蓮體和尙も亦、師の淨嚴和尙と同樣、衆生濟度の爲め、東奔西走はしてゐたが、高安の敎興、今里の妙法の兩寺も兼住してゐたから大阪からの行通も便利宜く親しく敎へを受くる事が出來たのである。此の蓮體和尙との師弟の關係からして、近松は淨嚴和尙にも師事したといふ、前の口碑や傳說も生じたのではあるまいかと、私は考へる。